

身近な課題に取り組み生きる力を育む 地域課題解決型キャリア教育

本場に「働く」経験になるインターンシップのあり方は何か？ アルバイトをしながら通う生徒も多い定時制課程で考えたのは、地元地域で小学生が働く体験を高校生がサポートする「ゆめ・チャレ」プロジェクト。スタッフとして活躍する高校生と先生にお話を聞きました。

小学生の職業体験サポートやものづくりによる社会貢献で自己有用感を育てる

第17回 堺工科高校 定時制課程(大阪・府立)

取材・文／江森真矢子



堺工科高校定時制課程の有志生徒が小学生の職業体験をサポートする「ゆめ・チャレ」は、2013年にスタートした。「パンを作ろう」「消防士体験」「おいしいコーヒーを入れよう」「注染手ぬぐいを作ろう」など、楽しそ

なメニューが並び、6回目に当たる今年2月には32事業所、275人の小学生が参加する一大行事になっている。モデルにしたのは「キッサニア」。2時間から半日程度と短いながら、職業に合わせた子ども用ユニフォームを用意し、体験後には「給料」として地元商店街で使える疑似通貨「100ユーメ」8枚が手渡される。高校生の役割は、受付や各店舗への案内、そして各事業所で大人と一緒に小学生に仕事を教えることだ。

スタッフ側に立つことで成長を実感

「1年生の時に保田先生にやってみないか、って声をかけられたんです」と生徒側のプロジェクトリーダーを務める松下伊織さん(3年次)は言う。「定時制高校にいい印象をもっていない人もいると思うんですけど、部活やボランティアを熱心に行っている生徒も多いんです。なにより、僕は高校に入ったらいろんなことにチャレンジしたいと思っていましたので「ゆめ・チャレ」も興味があって。やってみたら、めっちゃ良かった!」

教える側に立つ体験は初めてだったが、大人の言葉を噛み砕いて伝え、わかってもらえた瞬間や、戸惑う小学生を支え、「できた!」と笑顔を見せてくれたときの喜びはそれまでにないものだったそう。2度目の昨年は小学生への接し方が上手になった。「仕事体験」ではなく「仕事」として関わったことで自分自身も成長した実感があると言う。加えて、スタッフにと誘った友達の仕事への意欲をもち、アルバイトを始めたのも嬉しかったことのひとつだ。

プロジェクトは約半年かけて準備をする。毎年6月ごろから地元の企業やお店に協力を依頼し、話し合いながら小学生の体験内容を決めていく。その間、7、8月には高校生が1〜2時間の仕事体験をし、内容の理解と小学生に対するサポートについて打ち合わせを行う。10月ごろに教員が各事業所との調整を終え、11月から参加希望者の応募を待つという流れだ。教員主導で始めたプロジェクトだが、徐々に生徒の関わり度合いが大きくなっており、松下さんは「これまで協力してもらっていた山之口商店街

だけでなく、駅の東側の商店街にも声をかけて、もっと多くの小学生が参加できるようにしたい。それから、この取り組みを堺だけでなく、大阪、近畿、日本全国に広げたい」と意欲を語る。

目指すのは自己有用感を育てること

図1のように、10事業所、68人の参加者で始めた「ゆめ・チャレ」は年々応募倍率も上がっている。希望に応えようと規模を拡大してきたが、これだけの数を調整することは「正直、ものすごく大変です」と保田光徳先生は言う。「うちの先生たちの前向きな協力体制がなければできません」と言うように、小学生に渡す「給料」の協賛金集めから名前入り給料袋の作成、応募受付、名簿管理などたくさんの仕事がある。それでも、転勤した先生や卒業生が手伝いに来てくれるのは、小学生と高校生の成長に立ち会える喜びがあるからだろう。かつて定時制高校は勤労青年の学びの場であったが、そのあり方は徐々に変わってきた。基本的な生活習慣や

School Data

1940年創立/定時制・総合学科/生徒数152名(男子132名・女子20名)/進路状況(2017年度)進学予定7人、就職42人(就職希望者42人中)、その他2人。キャリア教育連携表彰優秀賞(2016年度)、時事通信社第32回教育奨励賞優秀賞(2017年)、第66回読売教育賞最優秀賞(2017年)受賞



右から 松下伊織さん(3年次・生徒会長)
保田光徳先生(首席・進路指導部長)

■「ゆめ・チャレ」の様子



気になる運営資金だが「ユーム」の原資は地元企業団体から寄付してもらっている。また、ユニフォームの作製は大阪府教育委員会に掛け合い、予算をつけてもらった。「『ゆめ・チャレ』実施に興味をもってくれたら、ユニフォームの貸し出しもノウハウの提供もいくらでもするので、声をかけてほしい」と保田先生は言う。

■「堺学」で作った製品



被災地に送る包丁には、1本ずつに生徒からのメッセージを入れた。寄贈品や寄付金は極力生徒が現地を訪れて渡すようにしている。岩手県釜石市に包丁や線香を届けた際には、市木のタブノキが線香の原料と知った市長から依頼を受け、釜石産の木を使った線香を作り、2013年の慰霊祭の際に800箱を届けた。

コミュニケーションに課題を抱える生徒が増えてきた頃から、保田先生は生徒が社会と関わる経験を意図的に増やしてきた。校内では「学校だけで育てるには限界がある、地域と学校と家庭が一緒になって生徒を育てていくのが理想ではないか」という議論が交わされた。「大切なのは自己有用感だと考えています。ありがと、と言われることや、自分の技術や知恵で人の役に立った実感がそれを育てるんやと思います」(保田先生)。

2006年から始めた学校設定科目「堺学」もそのための取り組みだ。工業系の特徴を生かし、地元の伝統工芸士を講師に招いてものづくりを学ぶ授業だ。例えば打ち刃物講座(堺学A)では、約5カ月かけて自分だけの包丁を作りあげる過程で、地味が悪くなっている頃では」という生徒の声が契機となり、伝統工芸士の方々と共に東北各県を訪れ、寄贈した包丁の砥ぎ直しを行った。線香作

りをする堺学Cの生徒たちは、被災した各市の市花の香りの線香を作った販売し、売り上げと共に線香を寄贈する活動を続けている。

保田先生は、ものづくりを体験した生徒は「作り手の気持ちや世の中の仕組みがよく見えるようになる」と視野の広がりも指摘する。また、地域が学校を見る目も変わってきたことを実感しているそうだ。「『ゆめ・チャレ』によって商店街を訪れる人が増えたり、伝統地場産業を誇りに思う若者が増えることは地元で歓迎されています。また、地元事業所の協力もあり、在校生徒の就労率は95%、就職希望者の就職率は100%に上がりました(School Data参照)。

地域と家庭と共に生徒を育てるといふ理想に近づいています」

理想のあり方は地域と共に生徒を育てること

図1 ゆめ・チャレの実施規模推移

	実施日	協力企業数	体験数	応募者数	体験人数(小学生)	参加生徒数(高校生)
第1回	2013/12/15	10	10	107	68	12
第2回	2014/2/23	18	28	235	129	18
第3回	2014/12/21	20	34	312	167	20
第4回	2015/12/20	24	43	436	205	25
第5回	2017/2/26	29	52	620	241	36
第6回	2018/2/4	32	58	720	275	46